地域住民と大学が連携した取り組みを

北海道医療大学歯学部
口腔構造・機能発達学系
保健衛生分野 教授
歯学博士
千葉（ちば） 逸朗（いつお）さん

当別SP研究会
代表
三上（みかみ） 富弘（とみひろ）さん

北海道医療大学は、医療、福祉などさまざまな観点から地域との連携を図り、交流を深めています。今回は、模擬患者（以下、ＳＰ）を通した大学と町民との連携についてお話を伺いました。

ＳＰとは？

歯科医を目指す学生がより実践的に臨床実習が行えるよう、細かく設定されたシナリオを忠実にＳＰが演じ、学生がどのように対応していくのか、そのノウハウを学ぶための町民と連携した取り組みが、平成16年1月にスタートして今年で11年目を迎えました。講義で学んだ知識や模型を使った技術だけでは、臨床経験のない学生が実際に患者を受け入れた時に、すぐ診察・治療ができるとはいえません。より現実に近い状態で患者とのコミュニケーション能力を向上させ、経験値を増やすことで資質向上を目指すべく、町民の皆さんにＳＰの協力を呼びかけたところ10人以上の応募があり、そこから大学と町民との関わりが始まりました。現在は40人ほど登録しており、その大半が町民の方です。　（千葉教授）

※ＳＰ：Simulated Patient の略

ＳＰになったきっかけは？

学生には立派な医療者として成長して欲しい。そのために自分が力になれるものがＳＰでした。個人的には、実際にどのような臨床実習をするのか興味があったのも応募したきっかけの1つです。ＳＰとなるためには、最低限の医療知識を持つ必要があります。そのため、講習に参加して基礎知識を身につけると共に、症状・現病歴・生活背景・生い立ちなど細かに設定されたシナリオに沿って患者になりきることが求められるので、何度もトレーニングをしました。実習終了後には感じたこと、アドバイスなどを学生に伝えます。そこで学生は自分の長所や短所に気づき、次回の実習に向け改善されれば、私たちが果たす役割はとても重要なものだといえます。　（三上代表）

連携が目指すところは？

学生は地域で学び、地域の住民は学生教育に参加すること、すなわち「キャンパレス教育」を推進していくためにも、町民の皆さんがＳＰとして大学と学生に協力していただいていることに感謝しています。単に知識が豊富で技術に優れた医療人を育てるのではなく、患者の話に耳を傾け、痛みに共感し、あらゆる事象にも柔軟に対応できる医療人として活躍できるよう、現在は歯学部のみならず看護福祉学部などでもＳＰ実習を取り入れています。（千葉教授）

ある日、ＳＰとして関わった学生と実際に医療現場で再会したことがありました。「当時はお世話になりました」とお礼を言われたのですが、立派な医療人として頑張っている姿を見て、もっとＳＰとして頑張っていこうという気持ちになりました。現在、男性ＳＰが不足しています。学生を応援し、医療を向上させる意味でも協力者が増えることを願っています。

（三上代表）

【7月6日取材】

緊張した面持ちで演習に臨む学生